

かさおか

発行所
天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)
電話 66-1311
FAX 66-1314



菜の花

初代の心にかえり信仰の喜びを
深めよう 伝えよう 広げよう
一、持ち場立場で日々理作り
一、家族揃って教会参拝
一、一日一件にをいがけ

立教172年
4月号

学生層育成者講習会

まず自らが、日々陽気ぐらしを実践し

“各会の合力”をもって

立派なよふぼくを育てよう!!



ご経験を織り交ぜながら、
解りやすくお話しくだされる谷澤先生

去る2月21日、大教会祭典講話として、本部学生担当委員会学生生徒修養会部委員谷澤茂男先生(本理世部属本芝房分教会長)を迎え、学生層育成者講習会が開催されました。

まず、昨年11月25日に開催された「学生担当委員会発足30年記念・学生担当者大会」における真柱様の「お言葉」をうけて、1月例会で発表された立教172年度の活動方針を紹介されました。

即ち、

基本方針

『お道の素晴らしさ、教祖の御心、
たすけ心を学生へ』
私たちが育成者は、後に続く者を育てる使命の重

さを再認識し、ゆるぎない信仰信念を培い、根気よく育成活動をすすめよう。おたすけの心をもって育成行事をはじめ様々な場で、学生にお道の素晴らしさ、信仰の喜びを伝えよう。更には、学生が教祖の御心を体して、将来どんな立場にあっても、教えを實踐し、教会を抛り所として、世界に向かっておたすけのできるよふぼくへと育つよう丹精しよう。

活動方針

- 一、全教区・全直属での学生層育成者講習会の開催
- 一、学生生徒修養会への教会長子弟、初参加者増員に向けての働きかけ
- 一、高校生のつどい「まなびば」をはじめとする、教区での育成活動の充実
- 一「Happist」・「別席のすすめ」の活用です。

若い人の育成は大変

「若い者寄り来る処厄介、世界から見れば厄介。なれど道から厄介ではない。道から十分大切。(中略)年の行かん者我子より大切、そうしたなら、世界からどういふ大きい事に成るやら知らん。すれば、そんだら何が間違うてある。日々という、言葉一つという、これ聞き分けてくれるよう。」(M

26・6・19 平野トラ身(願)という「おさしづ」を引用され、私たちの理解を超えるような若者(コンビニ前の地べたに座りたむろしていたり・様々な色に髪を染めたり・ワケのわからない言葉をしやべったり・)であっても、それを恐れず臆することなく接して、親心をもって声をかけ続けてあげることが大切で、この「おさしづ」には親神様の本当に深い親心を感じさせていただき、育て方の答えが示されていると述べられ、ご自身の関わった2つの例をあげられました。

① T君の話

30年ほど前に入信されたお母さんと一緒に教会へ来るようになりますが、T君が参拝に来ると、神様の道具・神饌物までも片付けた幼稚園時代、暴れん坊で「T君とは遊んではいけない」といわれた小学時代、おちばがえりへ行っても楽しませてくれるお兄さんの邪魔をしたり、大声を出したりした中学時代、教会内でタバコを吸いながらマージャンをした高校時代を経て、今では立派なよふぼくになっています。これは小さい時から教会や会活動に通っていたこともありませんが、もう一つは親(お母さん)の信仰のおかげであります。お道の信仰こそが「夫婦がおさまる信仰」なんだと感銘し、「人より2倍、3倍つくし・はこびをし

なければ救かりません」との仕込みから、おつとめ・にをいかけ・おたすけを10年・20年続けられた結果であります。T君は高校卒業後、電気工事の職人になりますが、社会へ出ると(高校のときまでは嫌々やっていた)ひのきしんの心がわき上がり、トイレ掃除や人が嫌がることでも気がついたら体が動くようになっていました。そして教会の月次祭・青年会をつとめる中、教会の女子青年さんと結婚し今では3人の子供の父親になっていきます。しかしそのT君も、つい最近親神様からお仕込みを受けました。心のすれ違いから、結婚記念日に夫婦げんかをし、奥さんを突き飛ばしたところ窓ガラスが割れてしまったのです。T君はその様子を見て自分の心が壊れていくように感じたそうです。小さい時の父親の姿がフラッシュバックして、お父さんも物にあたっていたなあ、自分も、もしお道がなかったら日常的にお父さんと同じようなことをし、こんなことから家族を捨てて外へ行ってしまったんだろうと思ったそうです。自分のありがたい今の環境を喜べないでいたということなのです。彼は夫婦げんかからハッと我に返ることが出来たのであります。私は「ああ、よかったですね。これでいんねんの自覚ができたね。いい結婚記念日になったね。親神様 教祖のおはたらきですすごいね。」と言わせてもらいました。彼は夫婦げんかがそのように悟れたことに対して「信

仰っていいですね」と言ってくれました。そして彼のお父さんも参拝するようになり、親子三代、家族中で参拝するような幸せな家族となりました。今でも親神様から親心をたっぷり頂戴してお育ていただいているわけです。

やっかい者はいない

先程の「おさしづ」ですが、厄介者というのは、厄介者扱いしてはいけない。お道には、そういう厄介者も十分なんだと教えてもらうわけですから、私は厄介者を放っておいたら本当の厄介者になってしまうと思います。昨年、東京の秋葉原というところで痛ましい事件がありました。あの犯人を取り巻く環境はというと、まず家族の崩壊、断絶。そして友達がいらない、自分の行き場所がない、居場所がない。孤立した背景が生んだのがあの事件だと思えます。もし家族が仲良くおさまっていたら、声をかける人がいたならば、彼の居場所があったならば、こういうことは起きてなかったと思います。そういう居場所をつくるのが教会や会活動であり、どんなやっかいな者でも暖かく育て、見守らせていただくのがお道の役割ではないかと思わさせていただきました。

② Yちゃんの話

Yちゃんは両親と弟二人の五大家族。お母さんが学生時代ににをいがけからお手引きをいただき入信。しかし結婚したご主人は信仰には大反対。三人の子供達が鼓笛隊や教会の様々な行事に参加するのも快く思わず、そのことで夫婦のけんかは絶えませんでした。教会からは三泊四日のこどもおぢばがえりも中学二年生までは一泊二日の別行動でしか参加することが出来ませんでした。中学三年生になって最後のこどもおぢばがえりに何とかみんなと一緒に帰りたい。どうしたらお父さんに許してもらえらるだろうか、と私のところに相談に来ました。「お父さんは自分だけ仲間はずれになっていて寂しいんだから、お父さんの喜ぶ話をしてみよう」とアドバイスをし、Yちゃんは親孝行の心定めをして、二十一日間、お父さんの喜ぶ野球や昔家族で旅行したときの話などをしました。二十一日経ってお母さんと子供達三人がお父さんの前に座り「お父さん、こどもおぢばがえりを許して欲しいんです。お願いします。」と言うと、今まで大反対していたお父さんが「じゃ、行ってこい」と言ってくれ中学三年生になって初めて団体列車に乗ってみんなで帰ることが出来ました。そして家族揃って神殿でお礼とお願いのおつとめをしたんです。「親神様、今度はお父さんを

おぢばに呼んで下さい」とお願いをしました。親神様はその願いを受け取って下さったのか、秋頃になってお父さんの身上がだんだん悪くなり糖尿病だということがわかりました。仕事にも行けない状態になり「救ってください」と奥さんに伴われて教会の門をくぐりました。それから修養科へ入られ、親神様よりご守護いただき今では元気な体に戻っています。その陰では三ヶ月間、家族が毎日十二下りのお願いづとめをしていたそうです。Yちゃんの願い通り、今や家族仲良く教会に参拝してくれるようになりました。これもやはりその背後にはお母さんの信仰というものがあると思います。学生時代ににをいがかりお道に引き寄せられ、感激を受けてその感激を忘れることなく持ち続けたということ。子供にも信仰を伝えなければ家のいんねんは変わらないとの自覚から、主人から執拗なまでの反対をうけながらも、子供に信仰を伝えたいという信念、そして子供達にもそのことが伝わって、お母さんを支えるまでに育ったということなんです。ですから、若いときの信仰というものは、ずっと将来のために培っていくものなんだなぁと思わせていただきます。そういう若い者の年代に応じた丹精・育成というのが会活動だと思います。小さいとき、小学生・中学生は少年会でお育ていただいて、高校生になったら、大学生・専門学校生には学生会という会が

あります。そしてそれを卒業していきますと、青年会・女子青年・婦人会という一貫した流れがあるわけです。会のスローガンはみな違いますが、「立派なよふぼくに育てていく」という点においては、どの会もみんな同じ目標をもって活動していると思わせていただきます。ですから「各会の合力」は、よふぼくを育てる重要なキーワードであると思います。

道と社会で活躍する
人材育成を目指して

親神様・教祖の教えに触れて、小さな頃から少年会で培ったことを学生会へ、そして青年会・女子青年へと、そこで学んだ信仰の心をもって社会に出たなら、社会の即戦力だと思います。真柱様は昨年の学生担当者大会で「皆それぞれ一つの心、子供一つの心、子供仕込む聞き分け。あちらも柱、こちらも柱無くばならん。だんだん芽吹く理無くばならん。子供仕込むだけ、十分の働きもあるう。(M34・4・16)」とおさしづを引用され、あちらもこちらも、どのような職業に就く人も、陽気ぐらし世界を実現するための柱、いわゆる芯となるような人、中心的な役割を果たすことが出来るような人材を育てよと仰せられ、将来立派なよふぼくとなるべき芽、素地が身に付くように仕込んでい

くのが大切である。と述べられました。

女子学生の話

彼女は一流といわれるホテルに就職しました。約三百人の同期の者は一様にフロント業務を希望するわけですが、研修でどんどんふるいにかかられます。皿洗い・ベッドメイキング・便所掃除・雑巾がけ・ごみ集めといった雑用をさせられ、一週間もすると「こんなやってられない」「こんなはずじゃなかった」「もう帰りたい」と書いていくような顔になります。しかし彼女は、少年会・学生会で身につけたひのきしんの態度があるので、雑巾は年中さわっているし、食堂でお皿洗いもした。トイレ掃除は尚更お徳がいただける。一週間たてば顔が清々しくなってきました。そして最後は三百人の内三人に絞られて、彼女が一番メイソンのホテルのフロントに就くことが出来ました。「会長さん、おかげさまでこんな仕事に就くことが出来ました」と彼女は報告に来てくれました。私はそのホテルのフロントに就けたことが嬉しかったのではなく、彼女が実践したお道の教えが社会に通用したということに非常に感激しました。これは、少年会・学生会からお育ていただいた、またその裏で親もつくし・はこび、おつとめにをいがけ・おたすけの御用を一生懸命やったこ

とが、今本当にお道の学生や若者達が、混迷を極める今の時代の社会で生きる力をつけていると思います。お道の子達は良くなっている。これは各会の先輩方が積み上げてきた賜物や若年層育成の意識が浸透してきたからではないかと思えます。特に鼓笛隊・少年ひのきしん隊の卒業生は素晴らしい。

最後に

昨年の学生担当者大会での真柱様のお言葉を紹介します。「次代を担う若者へ、私達が伝えなければならぬことは、教祖の思召に即した信仰の喜びでありますから、まず自らが、日々陽気ぐらしを実践して、その姿を映して、をやの教えが届くように、根気よく勤めて頂きたいと思えます。どうか、教祖が教えられた誠の道を、確固たる信念を持って歩み抜いて、一人でも多くの立派なよふぼくを育てて下さるようお願いし、挨拶と致します。」と述べられました。只今の真柱様の思いに応える環境をつくらせていただくことが学生

担当委員会の役割であります。お願ひしたいことは、教会長の先生方、また信者の皆様方も若い学生さんに立派なよふぼくへ歩む道をつくってあげることが、これからのお道、また社会が輝いていくことになるのです。お道には素晴らしい若者がたくさんいます。その方々が必ずや将来、道と社会を担ってくれる若者達だと思えますので、一層、学生層・若年層の育成の上にご丹精、お力添えを賜りたいと存じます。

(学生担当委員長 吉岡 誠一郎)



▼養徳社発行『陽気』誌三月号、「道柳」より転載

▽今回の課題は「無」、笠岡に繋がる教友の方が選ばれ掲載されましたので転載させて頂きます。おめでとうございます。

佳 詠 東悠分教会前会長夫人 田 林 美智子

無我の境真摯に祈る御神前

▼表紙の絵

福満分教会前会長夫人 福島悦子さん

▼4コマ漫画 大教会 上原元子さん

手振りを交えての講義に
熱心に聴き入る教会長のみなさん



心の悩みとおたすけ & 初代の道すがら 立教172年 教会長講習会

「心の悩みとおたすけ」をテーマに教会長講習会が開催され、講師の豊富な知識と実体験に大きな勉強をさせていただきました。また「笠岡初代・上原さと様の道すがら」の講演に改めて初代のたすけ心の素晴らしさに感銘を覚えました。

今年はおつとめ奉仕者の増員を目指して丸二年過ぎて三年目に入った今、現代の悩みともいえませす「心の悩み」の講演におたすけの大いなる力となし、「初代の道すがら」に今年の120周年記念祭に向かったのスローガンに具体的な取り組みを勉強、練りあいを重ねさせていただきました。

講習会内容

日程 2月26日(木)〜27日(金)

会場 笠岡詰所

参加 112名

内容

・第一講 「心の悩みとおたすけ」

井上隆文先生(芦津部属理風分教会長、

天理やまと文化会議委員)

・第二講 「笠岡初代・上原さと様の道すがら」

上原繁道先生(大教会役員、陶山分教会長)

・練り合い 17班に分かれました。

「第一講の講話を受けて」

「笠岡創立120周年のスローガン・実践項目について」

・御本部朝勤め参拝、回廊ひのきしん。



データが映し出されたスクリーンに
学生時代を思い出して食い入るように見入る



一言の会話や人と人との出会いに、神様の引き合わせを感じ、おやさまのお導きを感じる事は、布教に携わる者なら少なからず経験したことがあると思います。特に海外での布教はその孤独さや、現地の人の純粋さからそれを身近に感じる事が出来るように思います。全くお道の教えの届いていないタンザニアを訪問させて頂いたこの度の渡航は正にその言葉通り、何度も訪問中にそれを感じるものでした。

この度のタンザニア訪問は約3年前、神戸でをいがけ中の私たち家族と一人の黒人医師との出会いから始まった。大教会長様から神戸にをいがけに行くように言われて、毎月家族で、10日間ほど摩耶の教会を拠点にをいがけをさせて頂くようになつて半年、遅々たる歩みだがパンフレットを取って下さる家が数件出来始めた頃、私の誕生日と、摩耶に住んでおられる方の誕生日が重なり、その方が神戸オリエンタルホテルに夜バイキングに連れて行って下さった。お腹が膨れかけた頃、私たちの食卓の前を身体の中でも大きな黒人男性が通りかかり、私たちのテーブルの近くに座った。子供達が「お父さんお母さん、変わった人がいるよ」と。人を見かけて判断したらだめだよ、と子供に言いつつ、毎日神戸の街を歩きながら、「ひょっとしたらあの人が神様の話を聞いて

ここがタンザニア

くれるかもしれないよ」の口癖をその場で言うと、子供達はその人に「ハロー」と声をかけに行った。その英単語しか知らない子供達は、その方が英語でべらべら話し始めた途端に家内を呼び、そして私が呼ばれた。話してみると、その方はマungaさんというお医者さんで、その時アジアエイズ学会が日本であり、タンザニアからゲストとしての学会に呼ばれ、神戸での学会の場所がそのホテルであつたらしい。その事を聞き、まず自分たちが天理教の布教者であることを話し、私がアメリカニューヨークで6年間おたすけを通して経験したこと、そしてその中でエイズの方も多くおられ、不思議な御守護を見せて頂いたことをお話しすると彼は暫く考えて、「私の国にも来て助けて下さい。天理教センターを設立してください」とお願いされた。

この時初めてタンザニアというアフリカの大陸の国を知る。タンザニアの人口は約360万人で、貧困と衛生面が非常に悪く、医療機関が乏しく、子供を病院に連れていけない親が多くら歳までに亡くなる可能性が高く、平均寿命が46歳。タンザニアには200万人の孤児が居て、そのうち110万人がエイズにかかっているという。彼はオレスという名刺を私に下さり、その200万人の孤児を世界のNGOの団体が分けて救済しており、その一つがオレスで、彼は医者でありながらその救援のコーディネ

ネーターをしている。

彼に天理教の英文パンフレットを手渡し、メールアドレスを交換し、その時は別れた。それから3年間メールのやりとりを繰り返し、昨年6月3年ぶりの再会となったのである。その間彼は天理教のホームページを英語で見て勉強をして、教えの素晴らしさを確信したという。彼は医者でありながら、孤児を助けていると病気に對する医療の限界を感じる。そんな子供達の心を救うのに信仰が大切だと言う。心や精神の面を助ける事が重要だと話す。

さて、6月に来日してすぐ大教会へ来て貰った。順序参拝をする傍ら、近所にある子供達の通う小学校(城見)を訪問、また衣料救援を毎年行っている道竹分教会の会長さんに会って頂く。小学校で各教室をまわり、親があること、教室で勉強出来る事の喜び、文具のある有り難さを子供達に伝えた。後日それが校長先生を中心にPTA、生徒達に呼び掛け、要らなくなった文具、楽器等一箱をタンザニアの孤児に送られることになる。また、道竹の平野会長も今年の物資をタンザニアに送る事を後日伝えて下さり、それがおたすけと衣料救援というこの度の訪問の大きな目的となった。

さて、6月に別席8席まで、そして12月に再度来日したときの26日の夜おさづけの理を拝戴する。タンザニアの国2人目の用木誕生である。その頃から大教会長さんが、一度タンザニアの国を訪問してみても、と言って下さった。さて、行くと言ってもこの国は、アメリカやカナダの様に簡単に行こうというわけには行かない。まず入国するのにビザがいる。それだけでなく、予防接種が義務づけられている。A型肝炎2本、黄熱病1本と長い期間を置きながら注射していかないと身体に負担がかかる。保険にも入って初めて渡航出来る。それだけでなく、タンザニアの外務省が出しているホームページを見ると危険が多すぎ、最悪の状態が沢山書かれてあって渡航を躊躇されるに十分な資料が列記してあった。

訪問に当たって弥高山の岡崎ひさよさん(医療に直接携わる看護師という職業が、後にあちらの人々に大きな信用を得る)が自発的に参加して下さり、また天理大生の三代拓己君(将来性のある若い大学生という事で、後に向こうのスタッフから人気者と成る)も行かせて貰いたいという事で、全くお道ののをいの掛かっていないタンザニアの国におたすけ訪問をする3人が決定した。私はこの3人をおやさまから選ばれた者達としてドリームチームと名付けた。出発までに何度も長い時間をかけてタンザニアの国事情や今回の思いやおさづけの取り次ぎや自分達の思いを腹を割って話し合い、全ておやさまにお凭れする心を誓いあった。

出発は奇しくも本部春の大祭の日。夜中に飛行機に搭乗した。1度乗り換えをして最初に着いたのが商業の首都ダルエスサラームで、日中32℃



おさづけの取り次ぎ



ダルエスサラームのマユンガさんの家の前で、奥さんと共に



城見小学校からの鉛筆を子供達に手渡す



聾啞の施設にて



資金が足りなくて頓挫している孤児院建設現場でお願いづとめをさせて頂いた後で



この国の人の幸せを願い路上での12下り

この国の人の幸せを願い路上での12下り
 この国は貧困と医療施設や予防薬の不
 足、汚れた水、マラリアの蚊など衛生面
 での問題など日本人からみて不自由だと思
 えることが多々あるが、その不自由の中
 で家族や人々が助け合う姿の中に見る
 子供達の笑顔や大人の生き生きした姿を
 みると、本当の幸せとは何なのかを考え
 させられた。
 今回の訪問で8カ所の孤児院、2カ所
 の中学校、1カ所の小学校、キリスト教

あった。真冬の日本からシャツ1枚になるほど、
 大汗の生活が始まった。こちらに着いてマユンガ
 さんの家に滞在させて頂きながら、朝勤めから始
 まり、日中はマユンガさんの親戚、知人へとおさ
 づけが毎日どんどん広がって行った。昨年の10月
 からケニアに来ていた米府、雲東の若者2人も合
 流し、路上での12下りやおたすけに勢いが増した。
 心配された食べ物、水とマラリアの心配をよそに
 4日間の都会での生活も終わり、いよいよ900キロ
 離れたソンゲアという田舎町に向かった。なぜそ
 こに行くかというと、そこにマユンガさんが所属
 するオレスが支援する孤児院がたくさんあるから
 である。その孤児院に今回の岡山教区の衣料物資
 や城見小学校の文具などを分配して回ることに
 なる。朝7時に出発し高速道路もない道をひたすら

16時間走り、標高が1000メートルを越える肌寒い町
 に着いたのは夜も11時半、次の日から孤児院での
 セレモニーを幾つもこなすことになる。
 こちらに来て昨日までの都会の生活と異なるこ
 とを経験する。それは家の中に水がないこと。常
 に雨水を貯めておいてそれをトイレの後に流した
 り、それでシャワーを浴びたりする。また、電気
 の需要が多すぎて、供給が間に合わず、1日の半
 分は停電している状態である。夜も懐中電灯とろ
 うそくで過ごす日も幾日もあった。最初戸惑った
 が、知らぬ間にそれが出来るようになっていった。
 ところがこちらに来た頃から他の2人の体調が悪
 くなってきた。こちらに住めば必ずなるよと言わ
 れていた下痢になり始め、いつしかドリームチー
 ムがゲリウムチームと化していた。覚悟していた

ものの、回数がひどくなり腹痛まで起こると真剣
 になる。お互いにおさづけを取り次ぎ合うよう
 になった。それでも3日程でそれも治まり最低限の
 症状で治めて頂いた。そういう状態でも毎日孤児
 院への訪問とセレモニー、そしてこちらからお道
 の話と皆の健康と幸せを願ってそれぞれの場所3
 ,4百人の前でよろづよ八首をおどらせて頂いた。
 また、人数が可能な所では希望される重い身上の
 方々におさづけを取り次がせて頂いた。1番多
 かったのは67人の方に3人で順番に取り次がせて
 頂き、セレモニーの間であったものの約1時間か
 かって全員に取り次がせて頂いた。多くの方が喜
 んで下さり、帰る時には合掌されたり、アサンテ
 (ありがとう)と、みんなから握手を求められた。
 大変な環境や病気にも関わらず喜んで下さる純粹
 な心にこちらが心を打たれた。

系病院1カ所、キリスト教系聾唖の施設1カ所、市長、州知事、日本大使館などを訪問させて頂き、約3千人の人に接しさせて頂いた。約130人を越える人の前でよろづよ八首を踊らせて頂き、3人で230回を越えるおさづけを取り次がせて頂き、神様のごくを430袋頂いて貰った。マユンガさんを始めオレスのスタッフ達の喜んで下さった顔が印象的だった。

このたびの訪問は全て1人の方との出会いから始まる。それも自分がそれまでに経験してきたおさづけとにをいがけを通しての出会いである。それに多くの方々のたすけ心が加わりこの度の訪問は成し得たと思う。私達一人一人の力は微々たるものである。しかし、それにおやさまが働けばどこまでも繋がり広がっていくということを感じ、何度も涙する20日間であった。

帰国しておおぢばに直行し、この訪問で預かってきた施設からの10通を越える手紙と、おさづけをさせて頂いた人達の名前を記入した紙をおやさまの前に供え、御礼とお願いを申し上げ3人のこの度のおたすけ訪問は終了した。

今回の訪問はそれ自体が自分達の意志でそうやってきたものではなく、これから先どうなるのかも全ておやさま任せである。これでおしまいと



鉛筆を手にとって喜ぶ子供達



孤児院の子供達の幸せを願い
お願いごとめ



資金が足りなく、完成されない中学校校舎

おやさまが仰せられればそこまでである。これからの日々の生活の中でこの度会わせて頂いた人達、見せて頂いたタンザニアの国の生活を思い起こし、皆の健康と平和をお願いしつつ、多くの助言を頂いてこれからの道を進めていけたらと思う。

今回の渡航が出来たのは、大教会長様を始め、教区、学校、またオレスの人々、多くの方々の協力および、それぞれ3人の家族の理解と尽力の陰であることは間違いなく、この紙面を借りて心より御礼を申し上げます。この記事を読んでも下さった方々の多くの助言をお待ちしております。有難うございました。

(海外部次長 上原 志 郎)

OYASAMA Asante Sanaji!

弥高山分教会 岡崎ひさよ

タンザニアを発ってから、ちょうど一ヶ月が経ち、原稿にむかひながら思わせていただく事は・・・

タンザニアの空気やにおいや風景、出会った多くの人々の顔や声、見聞きし、感じた事全てが、今でも鮮明に思い出されます。それほど、今回の伝道訪問が深く心に焼きついており、私は大きく心を動かされたと感じています。

タンザニアでは、八カ所の孤児院や小、中学校、病院などを訪問させて頂きました。出発前にもタンザニアは貧しい国である事、エイズなどの病気で親を亡くした孤児達がたくさんいる事を聞



ダルエスサラームでおさづけの後



水の出ない井戸



近所でおさづけの後



無事帰国して本部を参拝

いており、ある程度の予想はしていました。しかし、実際に目の当たりにしてみると、その状況は想像以上のものでした。水もない、電気も通っていない雨風をしのげるのみというような所での生活。又、ある孤児院ではたたみ十畳くらいの部屋に四十五人程の子供達が寝起きしているという状況であったり、孤児院の経営が困難な為、退所を求められたりという事もありました。又、中にはエイズやマラリアなどの大きな身上をかかえている子供達もたくさんいました。

そのような厳しい状況下ではありますが、どの施設に行かせてもらっても、私達の訪問を歓迎して下さい、私達を慕ってくれる姿や、無邪気な笑顔をむけてくれる姿に、心を打たれ、胸がしめつけられるような思いでした。

ここにいる子供達は、親の顔も知らない子もいるだろうし、エイズなどの病気で自分が亡くなっていく事をわかっている子もいるし、親からの愛情を知らずに大きくなっていく。日本で私は両親の愛情も十分にそそいでもらい、周りの人にも恵まれ、何不自由なく生活してきました。そんな自分がこの子供達の本当の思いをわかってあげられるだろうか？ 私に何が出来るっていうんやろ、と思うと、自分の無力さに悲しみが込み上げてきました。しかし、「私達の力は微々たるものだけど、教祖が働いて下さったら大きな力になるよ。」という志郎先生の言葉が支えとなり、本当に親神様、教祖におすがりするようないで「どうかこの子を助けて下さい」と真剣におつとめ、おさづけをさせていただきました。ようぼくであるから

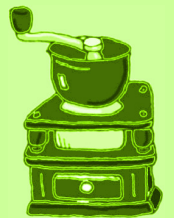
こそ、教祖のどの子供もみんな助けたいという思いのお手伝いがさせてもらえるんだなど、本当にありがたいなあという思いでした。

今回の訪問が結果として、どういう事になっていくかは分かりませんが、全て教祖まかせですが、遠いタンザニアの地で少しでも種まきをさせていただけた事が、本当にありがたかったなあと思います。

最後になりましたが、今回このような貴重な体験をさせていただけた事、少々の下痢になった程度で三人とも無事にお連れ通りただけた事を教祖にお礼申し上げるとともに、大教会長様はじめ、今回の訪問を見守り支援して下さいた多くの方々

Asante Sarati(アサンテサーナ)に心よりお礼を申し上げます。

談話室



素晴しき住込人、はは(姑)替歌

芦辺分教会長 松岡 睦代

紀元二千年一月四日、大腿骨折と、糖尿病で一年半、四力所の病院生活終え、教会初の住込人となりました。

はじめの朝、起きがけに鼻血出て寝巻きもベツトも血だらけ、二日目朝はトイレ行きが間に合わず、部屋は下痢のウンコ海、介護も中々大変よ。三日目の朝何が起こるやら、母さん開口一番申さる。「ここは教会、神様拝み教えて欲しい。」それから毎日特訓で、チャンポン、拍子木、すり鉢で、毎日十二下りつとめます。難しかった四下り四つ、よるひるどんちゃん扇の手、漸く上手に出来ました。十一月はじめ頃、体調すこし不良となりました。十一月九日月次祭、すり鉢十二下り終わりまで、上手におつとめ出来ました。お昼の直会も美味しく沢山食べました。母さん百まで私九

十まで。「何を食べても美味しいばかり、この世にまづい物何もない。」八十八才の十一月に、十年近く初席だけで、休んでいた人Sさんと、二人よふぶくの誕生、毎日さづけのお取り次ぎ。週に一度のホーム(養護老人ホーム)行。三時のおやつ持ち帰り「母さん(私のこと)これおみやげよ。」二人仲良く幼児の様に、わけわけしては食べました。我が家で出来た西瓜が好きで、甘味少なく糖尿病の母さんの、朝昼晩のおかずの一つ、十時、三時のおやつにも「美味、美味と食べました。」夏も終わり西瓜もおわり、これから何をあげませう。畠をみれば片隅の、転げ生えに大きな西瓜「養老西瓜」と名をつけて、美味美味と食べました。次はいちじく、富有柿と、おいしおいしと食べました。ああそれなのに母さんは、胃癌であると五ヶ月のいのちよと、それから五月たちました。苦しみもなくたちました。予告日まではあと僅か。母さんおさづけ終わったあとで、座りづとめ手もしっかりと、きれいにつとめ出来ました。我が教会の祭典はじまる一寸前、順序参拝に来たのかな? サヨナラ報を受けました。雛様みたいに美しい顔をして、微笑み浮かべ「あんたまだ若い、私が天理を習った年よ、弱音はくんじゃないんだ。」と。言葉少なな母さんが、微笑乍ら言っています。何時もそばに居る心地。

・原・稿・募・集・

内 容

①小随筆 ②教会・布教所の独自の活動の紹介
③俳句・和歌・川柳 ④教会行事開催後の報告記事 等々

字 数

1000字前後(800字~1200字)
題名・所属教会名・氏名を明記して下さい。
俳句等は1句からでも結構です。

寄稿先

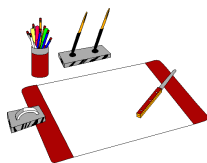
下記、大教会内『かさおか』編集掛宛ドシドシご寄稿下さい。

郵便：〒714-0066 岡山県笠岡市用之江377

FAX：0865-66-1314

メール：tenkasa@yahoo.co.jp

尚、原稿はお返し致しませんので、予めご了承下さい。



第5回大教会長杯親睦大スポーツ大会開催

大教会長様から「笠岡内でブロックを越えた親睦を深める会を開いて貰いたい」という思いで始まったこの大会も、今年で第5回目を迎えます。今年は5月24日(日)に行います。昨年は雨天の為、初めてのソフトバレーボールをしました。9チームがエントリーし160名ほどの人が集まり賑やかな大会を持つことが出来ました。今年も、多くの方々が参加出来るよう、1チームに会長さん、50歳以上の方、女性の方、少年会員も必ず入るようになっています。尚参加お供えは中学生以上一人500円となっています。当日はおいしいうどんが用意されています。体力に自信のある方も無い方も奮ってご参加下さい。

大会スケジュール

8:30までに茂平グラウンドに集合

(雨天でソフトバレーボールの場合は8:50までに井原勤労者体育館に集合)

開会式

遙 拝

大教会長様あいさつ

競技説明

選手宣誓

9:15

プレイボール

11:00より

昼 食 (13:00まで)

15:30

閉会式 成績発表

表彰式

挨拶

遙 拝



詳細は

直轄1 ブロック : 大教会神事所(内海史郎さん)

福 山 ブロック : 福満分教会長さん

高 屋 ブロック : 秀平元一さん(高屋)

島 根 ブロック : 島根分教会長さん

久 松 ブロック : 中村剛史さん(久松)

直轄2 ブロック : 湯田原分教会長さん

上 下 ブロック : 上下分教会長さん

府中市 ブロック : 甲井分教会長さん

までお尋ね下さい。



大会運営委員会

三月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいませ

親神様の御前に 会長上原理一 慎んで申し上げます

親神様の子供かわいい一条の果てしない親心によります天

然自然のお働きと自由の御守護のまに〜 日々は結構

に恙なく生活させて頂いております

中でも今は日毎に寒さも和らぎ 春の暖かさを感

じるようになり 野山では鶯が春の訪れを鳴き競

い 人々は何かしら喜びに包まれる素晴らしい季節

をお与え下さっております事は誠に有難く勿体な

い極みでございます 私共は花粉や黄砂に戸惑いな

がらも 日々はかしまのかりものの喜びと感謝の心

一杯に朝夕御礼申し上げると共に 世界一列救けたい

との思召に少しでも応えさせて頂きたいものとつと

めとさづけを通してたすけ一条の御用の上に勤め励ませ

て頂いております

分けても今日の吉日は これの笠岡の三月の月次祭を執り行う日柄

でございますので只今からおつとめ奉仕者一同 喜び心も一入に明るく陽

気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめさせて頂きます 御前に寄り集い

ました理に繋がる道の子供達が相共にお歌を唱和し 改めて日頃の御高恩

に御礼申し上げる状を御覧下さいまして親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて 大教会創立百二十周年記念祭に向けての成人の歩みも一月の直轄大祭参拝に続いて二月三月の部内巡教もつとめ終えて いよいよ本格的に

歩み始め出させて頂きましたが まだ足並みも揃ってとは言い

づらく 多少乱れもありますが 徐々に足並みも揃えて力強

く歩ませて頂きますので 何卒宜しくお導きの程をお願

い申し上げます 又年度変わりの旬に当たり 特に子

供達には心の階段を一段上がらなければならぬ大

切な旬を迎えています この旬を生かし 道の後継

者としての階段を上がって貰うべく ひと言でも多

く声掛けする中に 学生には春の学生おぢば帰りへ

の参加を促し 少年会員にはおつとめ学び総会への

参加を促して行く所存でございます

何卒親神様には経済不安の荒波にもまれながらも

教祖ひながたを心にどんな中も喜び心でたすけ一条に邁

進する皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして 万たすけ

の上に自由の御守護をお現し下さり 道の子のたすけ心をより一層

奮い立たせて下さいまして 記念祭に向けての成人の歩みを通しておつと

め奉仕者増員が果たせますようお導きの程を 一同と共に慎んでお願い申

し上げます



春季霊祭祭文

これの笠岡大教会の祖霊殿にお鎮まり下さいます本席様の御霊 初代真柱様並びに奥様の御霊 二代真柱様の御霊 大教会創設の祖上原佐吉大人八重刀自の御霊 初代会長上原さと刀自の御霊 二代會長上原伊助大人光刀自の御霊 三代会長上原繁雄大人くに多刀自の御霊 四代会長上原郁雄大人の御霊 笠岡の道の始めの頃より歴代会長と共に御苦労下さいました役員 部内教会長 教人 よふばく 信者の御霊 諸々の御霊の前に會長 上原理一慎んで申し上げます

祖霊様方には親神様のお見定めと教祖のお手引きを頂かれ早くからこの道に引き寄せられ 真実の親を知り 思召に添い切るべく ひながたを胸にどんな苦労の中も喜び勇んでたすけ 一条の上に勤め 励まれました 今日お道の結構な姿をお見せ頂いておりますのも ひとえに親神様教祖の御守護お導きの賜である事は申すまでもありませんが 又一つには祖霊様方のそうした ゆるぎない真実の伏せ込みの賜と 朝に夕にと御礼申し上げております 分けても今日この日は春の霊祭を執り行う定めの日柄でございますので 御前に心づくしの種々の物を供えて 参来集う人々と相共に在りし日の面影を偲び 御遺徳を称えて御心をお慰め申し上げたいと 只今は親神様の御前にてをどりをとめさせて頂きました

又教祖百三十年祭に向けて大教会創立百二十年記念祭を中間の山場と位置づけ「初代の心に帰ろう」を合言葉に 信仰の喜びを深め、伝え、広げて行こうと成人の実動を始めさせて頂いたところでございます

何卒祖霊様方にはそうした後に続く者達の心をお受け取り下さいまして 大教会を始め部内先々まで御心放たずお見守り下さいまして 家人は言うに及ばず理の弥栄えをご守護頂きますようお願い添えお導きの程を 一同と共に慎んでお願い申し上げます

第818期修養科募集要項

* 修養科期間

立教172年6月1日～8月27日

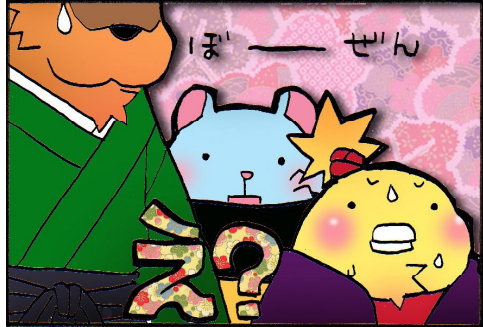
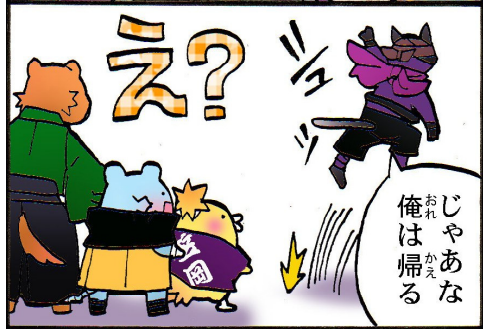
* 教 養 掛

3ヶ月間	横 山 逸 郎	(大教会准役員・東 城 分教会長)
1ヶ月目	三 阪 泰 人	(福 岩 分教会長)
2ヶ月目	森 川 弘 志	(弓ヶ濱分教会長)
3ヶ月目	村 川 和 司	(大江橋分教会長)

* 募集要項

- ・ 志願者は、6月末日現在で満17歳以上で、必要書類を携え、上級教会を經由して大教会に順序参拝すること。
- ・ 5月25日までに笠岡詰所に入所し、教養掛の面接を受けること。
- ・ 3ヶ月の修養期間を修了後は、大教会での修養科修了講習会を受講し、8月29日の昼食後に解散。

笹岡五人衆小間劇場 第七回「猫の恩返し」



つづく

大教会だより

◎教会指令◎

◎任命願

甲井 分教会

*前任

山田 敏教

*新任

山田 睦浩



☆奉告祭

立教172年5月3日

立教172年3月26日承認

◎教会長資格検定講習会修了者

前期 立教172年3月14日終講

明石市 杉原 栄司

芳井 藤井 ひろ子

後期 立教172年3月19日終講

御野 佐藤 哲

計報

今林ハナ姉

いわき布教所長

二月二十七日出直されました。

享年 百一才

ある日のこと、保育所に子どもを送りに行くとき狭い駐車場に立派なワゴン車が止まっていた。

私の軽四を止めると、出られるときに少し邪魔になるかと思って、長男と隣の娘さんを降ろしてから、改めて車に乗り込んでバックした。

咄嗟のことで記憶が薄いですが、慌てん坊の私は、恐らく：たぶん：キッと、左足でアクセルを踏んだに違いない。

咄嗟のことで記憶が薄いですが、慌てん坊の私は、恐らく：たぶん：キッと、左足でアクセルを踏んだに違いない。

咄嗟のことで記憶が薄いですが、慌てん坊の私は、恐らく：たぶん：キッと、左足でアクセルを踏んだに違いない。

咄嗟のことで記憶が薄いですが、慌てん坊の私は、恐らく：たぶん：キッと、左足でアクセルを踏んだに違いない。

咄嗟のことで記憶が薄いですが、慌てん坊の私は、恐らく：たぶん：キッと、左足でアクセルを踏んだに違いない。



開けっ放しの運転席のドアで、長男のおでこを強打し、立派なワゴン車の左サイドに大きな擦り傷を付けてしまった。

車は、後ろのガードレールに当たって止まったが、よく見ると、埋め込み式のポールが抜ける寸前までねじ曲がり、あわや大惨事となるどころだった。もし、ポールが抜けていたら、私は、開けっ放しのドアで2メートル下の田んぼに2人の子どもを押し落とし、その上に軽四を落としていたに違いない…。

帰宅して、家内には「大難を小難」と言い、それから会長様に「親切が過ぎたんでしょか? 要らんお節介だったんでしょか?」とお話すると「うっかりしとただけだ」と。

私は、ハッとしました。「大難が小難ではなくて、小難が無難だった」と。

このうっかり者の私が、常日頃、いかに親神様にお守りいただいていたのか気付かされ、いつもながらに的確な会長様のお言葉に敬服した。

(お)